

一心寺かわら版

第四十七号 令和元年九月発行

ホームページ・ブログ・フェイスブックは「持名山一心寺」で検索

「おてらくご」報告



今年桂文我師匠。まずは、落語と仏教の関係などをお話しくださり、小唄で徐々に場を温めて最初の演目「高台寺」へ。毎晩、一文銭で飴を買いに来る女性、七日目にお金がないと言う。三途の川の渡し賃は六文銭、この女性は幽霊ではないか。女性の後をつけていくと墓場で赤ちゃんの泣き声。掘り返してみると、骸になった母親と赤ん坊。いのち終えてもわが子のために三途の川の渡し賃・六文銭で飴を買い赤ちゃんを守る母親、いわゆる人情唄です。

幕間には「おてらくご」のお寺の部、「高台寺」に因んでのお話。この高台寺（飴買い幽霊）に出て来る赤ちゃんはゲゲゲの鬼太郎（墓場の鬼太郎）のモデルになったとか。三途の川とは此岸（この世）と彼岸（あの世）を分ける境目にある川。三途は餓鬼道・畜生道・地獄道をあらわすとも、川を渡る方法に三種類あったためであるとも言われます。その川の渡し船の料金は六文と定められており、仏式の葬儀の際には六文銭を持たせるといふ習俗が続いています。

六道とは三途の地獄、餓鬼、畜生に加えて、人間、天人、阿修羅の六つのこと。その姿を一つひとつ見てみると、私のことではないか、

現代に生きる私たちはまさに三途、迷い苦しみの中にいるのではないかと感じます。この三途、六道を超えてゆかなければ悔いの残る人生になってしまわないでしょうか。浄土真宗では三途の川の渡し賃は必要ありません。日頃お勤めする『正信偈』の最後の和讃に「仏光照曜崔第一：三途の黒闇ひらくなり」とあるように、阿弥陀さまのはたらきで三途の黒闇が開けて、浄土へと往生させていただきます。

「三途の川」の川にちなんで、美空ひばりさんの名曲「川の流れるように」を取り上げました。ひばりさんは「この曲はいいよね、人生っていうのは真っ直ぐだった曲がったり、流れが速かったり遅かったり、本当に川の流れるようなものなのよ。でもね、最後はみんな同じ海に注ぐのよ」とおっしゃられたそうです。親鸞聖人は「如衆水入海一味」（すべての水は海に入って一つの味となる、『正信偈』）とおっしゃられました。

「南無阿弥陀仏」とは、わが名を称えて浄土に生まれよという阿弥陀さまからの呼び声です。いつ、どこで、どんな人生を送ろうとも一つのところに生まれる、阿弥陀さまのはたらきである大きな川の流れるに乗って、お浄土で仏さまとなって会えるのです。

再び文我師匠の登場。他では聞けない伝説の落語家さんの破天荒な面白い話に大爆笑。そして最後の演目は「試し酒」。久蔵に「酒五升（約九リットル）飲み干せるか」と賭けを持ちかける。久蔵は「少し考えるので待っていてほしい」と言い残して表



に出て行く。しばらくして戻ってくるなり、大きな杯で、五升の酒を一升ずつ飲み干してみせる。あきれ果てて「どうしてそんなに酒が飲めるのか。さっき出て行った時に酒に酔わない薬でも飲んだのか。それとも何かまじりなくても受けたのか」とたずねると、久蔵は「五升も飲んだことがなかったので、表の酒屋で試しに五升飲んできた」。師匠の酒を飲む仕草が感嘆と笑いの渦を巻き起こしました。文我師匠の名人芸を堪能し、大盛況の「おてらくご」でした。

「仏教講演会」報告

毎年恒例の真宗興正派西讃教区仏教講演会。まずは開会のご挨拶。「近年、終活に注目が集まっています。

人生の最後に考えるべきこと、それは、医療・介護、葬儀・墓、相続、遺品整理の四つだそうですね。終活で葬儀・墓について考えるといっ

ても、家族葬にする、墓はいらない、などという事務的なことに終始しているのではないかと思います。終活といっても、何を宗（おね、根本の意味）として人生を生きるのかが問われなければ本当の終活にはならないのではないかと、という思いで「しゅう（終・宗）活について考えてみましょう」と題して開催させていただきました。

第一部はシンガーソングライター・リピート山中さん、アルバム名である『いのちのうた』と題してのコンサート。ヒット曲「ヨードル食べ放題」では来場者に呼び掛けて「た〜べほ〜だ〜い」、会場が一体となりました。それからの唄はまさに「いのちのうた」、トークも含めて心に沁み渡るものでした。



『なんとかなる どうにかなる なるようになる』では「どうにもならないと嘆くうち、どうにかなることもなくなくなりそうだ…なるようになる」の口ぐせを石に刻んで想守りにしました。心に響くと同時に、浄土真宗の他力の教えに通ずるものを感じました。

『ありがとうのうた』では「君に逢えてよかったよ、生まれてきてくれてありがとう…あなたの子どもでよかったよ、生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう」。家族のつながりといのちの尊さに胸を熱くしました。

医師に同行しての往診コンサートをされている山中さん。余命一カ月と宣告された男性とその家族と、唄を通じた心の交流ができて感動されたそうですね。老病死を避けるのではなく、真正面に向き合う中で温かいつながりが生み出されるのだと感じました。

第二部は釈徹宗先生の講演「しゅう（終・宗）活について考えてみましょう」。先生は「ニュースシブ5時」悩み相談「法護寺」など度々NHKに出演、そしてNPO法人ライフ・グループホームむつみ庵代表として、介護、看取りの現場にも立っておられます。

先生は「終活は現代社会から我々に出された宿題である」とおっしゃいます。延命治療などの終末期医療、様々な形で束縛されている契約社会、地域コミュニティの崩壊で孤立・独居が増加していると現代の課題を指摘されます。その中で、終活が単なる実務作業で終わるのではなく、自分の死に向き合う、宗（根本）に目を向けていくことこそが大切であると呼びかけられました。

『涅槃経』に伝えられるお釈迦さま入滅の姿、『蓮の露』に伝えられ



る良寛上人を看取った貞心尼の姿を例として挙げられました。仏教は、お釈迦さまの死をスーパースターの死ではなく、一人の高齢者の死として伝えていきます。そこには自分ではデザインできない、しかし、引き受けていくしかない老病死がまざまざと表されています。老病死は誰もが向き合わなければならぬ課題であり、そこに終活が宗活でもなければならぬ必要性があるとおっしゃられます。

り、終活の一つとしていただきたいと教示されました。浄土真宗はお浄土を宗とする教えです。帰るところ、お浄土がある人生を生きるこゝとが宗活、それによって安心して人生を終えることができる終活になるのではないかと感じました。

最後にお礼の言葉として「私たちが引き受けなければならない老病死を一緒に分かち合うことのできる仲間がいれば、最後に阿弥陀さまにおまかせすることができれば、私たちの心が軽くなるのではないかとお話させていただきました。真宗興正派のスローガン「今こそお念仏一つなごうふれあいの輪」も、それを願ってのものであると感じつつ、閉会としました。

「春季永代経」報告

「洪護寺」での相談では、人間関係と老いに関するものがほとんどだそうです。先生は「縁起の実践」、「空の実践」と呼んでおられますが、できる限り多くの場、人にかかわりを持つ、そしてそれに固執しない、という姿勢が大切であるとのこと。お世話され上手、おまかせ上手になれば、生きるのが楽になるでしょう。

そして、奈良国立博物館の西山厚さんのエピソードを紹介されました。障害者の方から「この頃、同じ施設の人たちが亡くなって怖い。死ぬのは怖くないという講演をして欲しい」というお願いがあったそうです。西山さんは、涅槃図を通して「父が亡くなった時におばあちゃん came 来た。それは当然、あれほど父を愛したおばあちゃん come 来ないはずはない。私の時には先に往った父が来ないはずがないという実感がある。だからその時に、父といひ話がたくさんできるように生きるんだ」というようなお話をされたそうです。

先に往った（亡くなった）方の目を意識しながら暮らし、先に往った方の願いに耳を澄ませながら生きていくのも長生きの値打ちである



例年通り、納骨堂で讃仏偈、本堂で阿弥陀経と正信偈をお勤め。法話は秋山和信師（高松市・慈照寺）。南無阿弥陀仏の「南無」の二字は我にまかせよ、「阿弥陀」の三字は必ず救うのお呼び声、「仏」の一字は親じやものゝと名調子で讃嘆。そう聞けばお念仏が出るでしょう？と語り掛け、最初は聞こえなかったお念仏の音がだんだんと出るようになってきました。最後は『お慈悲かぞえ詩』。「一つには、地獄必定と聞きながら、うぬぼれ心に邪魔されて、堕ちるわが身ということ、ほんに今まで知らなんだ…、十には、称える名号そのまま、つれて帰るぞまっておる、親の呼び声ということ、ほんに今まで知らなんだ」。終わる頃にはみなさん「なんまんだぶ」とお念仏。阿弥陀さまのお慈悲を有難く頂戴しました。

「ぶちしるべ&万灯会」報告

天候が心配された「ぶちしるべ&万灯会」。午後六時に『無量寿経』をお勤めして「万灯会」が開会。次第に雨も上がり、映像作品と竹灯りが境内を美しく彩りました。初登場の子ども灯籠に願い事を書くお子さまの姿が微笑ましかったです。あいにくの雨模様で来場者は多くはありませんでしたが、夏の終わりにご家族一緒に仏さまに想いを届ける夜になりましたなら幸いです。(境内の大銀杏が光の宿り木に)



誕生報告

八月二十一日に第三子が誕生、元気な男の子です。一心寺の一員として、どうぞよろしくお願いいたします。



古澤巖奉納公演のご案内



日本を代表するヴァイオリニスト・古澤巖さん。六月には観音寺市ふるさと応援特別大使・音を観るまちアンバサダーに就任。毎回、満席大盛況の奉納公演。ご予約はお早めに一心寺まで。★一心寺本堂にて、令和元年十一月九日(土)午後三時開演予定。全席自由・二五〇〇円。お車は観音寺市まちなか交流駐車場(市民会館前)へ。

よるしるべ&よるしらべのご案内

恒例となった観音寺の夜のまち歩き「よるしるべ」。十月二十五〜二十七日、十一月一〜三日の六日間(午後六時〜九時)開催! 本堂での「よるしらべ」声明雅楽コンサートは十月二十六日(土)午後七時〜、舞楽は十一月一日(金)後七時〜、どうぞご来場ください。

